



令和七年度 国 語

問 題 冊 子

注 意 事 項

- 一 監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 問題冊子は、12ページに組んである。落丁、乱丁及び印刷不鮮明なものがあれば、すぐに申し出ること。
- 三 全ての解答用紙に必ず本学の受験番号、氏名を記入すること。各解答用紙に受験番号欄と氏名欄がそれぞれ1箇所ある。
- 四 解答は、解答用紙の指定された解答欄に記入すること。異なる解答用紙・解答欄に記入されたものは採点されない。
- 五 記入した解答用紙は、裏返して机の上に置くこと。
- 六 解答用紙の※欄は記入しないこと。
- 七 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「それってあなたの感想ですよね?」「エビデンスはあるんですか?」などのフレーズを最近よく耳にするようになった。

数値による判断のみが重要であると考え、^A個人の経験を「お気持ち」として批判する人がいる。もしかすると経験にもとづく判断は、心許ないものだと考えているのかもしれない。

ア

客観的な数値と個人の経験は異なる次元の出来事であり、異なる真理をもつ。

客観性をもたらす正しさとは別の、一人ひとりの経験がもつリアリティに属する真実がある。ケアの現場のように、個別に偶然生じる経験や文脈が重要なとき、数値的なデータにのみ頼ると大事なものが抜け落ちてしまう。

数値と対比される経験のリアリティについては拙著『客観性の落とし穴』(ちくまプリマー新書)で論じた。今回は、論破やネット上での炎上がもつ独特の時間感覚を、経験と対話の時間と対比させながら議論したい。経験と対話の時間がショートカットされる時代としての現代が主題となる。

人生の蓄積と偶然性

論破の時間を論じる前に、まず準備として経験と対話の時間について略述する。

個人の経験は偶然の出会いと出来事^①と翻弄されると同時に、人生の蓄積を背景として生まれる。偶然と蓄積はそれぞれ異なる質のリズム^②時間をもつ。過去が現在のなかに何重もの異質な層で蓄積するなかで、あるタイミングで偶然の出会いがある。ところで経験の個別性は、心理や感情(お気持ち)ではない。歴史的な文脈や社会状況、そして人間関係の絡み合いや偶然の出来事のなかで経験が生じるからだ。経験の個別性は、世界との出会いの偶然性とそのつどの応答のしかたの多様性からなる。同時に、私が判断を迫られる状況そのものもつねに個別的であり、私の視点からしか見えない事情が残る。外から俯瞰^{ふかん}的・客観的に見たときには死角が生まれる。

経験を取り囲む状況には、相互に異質でさまざまなファクターが絡み合う。そして多様なファクターはそれぞれ別種のリズムをもっている。私が研究してきた社会的困窮^②地域での子育て支援を例にとつてみる。離婚や虐待といった家族関係の葛藤、失業や貧困の連鎖、民族差別の継続、男女差別、アルコールや睡眠薬など物質依存や心身の不調が絡み合う。

論破には対話がない

これらの逆境体験は、それぞれが全く異なるが、しかしその人だけが経験する特異な絡み合いであり、一つひとつの要素はそれぞれのリズムをもちつつ連動する。経験を取り囲む状況は絡み合い、交わらないリズムのもとで複雑に推移する。過去がときには世代を超えて現在へと何重にも蓄積するのだが、何重もの層はそれぞれのリズムをもつ。

イ

私たちの思考は、長い時間をかけて蓄積される過去の経験と対話によって準備されており、経験から導き出される判断は多くの逡巡^{しゅんじゆん}とともになされるものである。経験そのものだけでなく、経験についての対話と思考もまた時間の厚みをもつ。今回のテーマは論破であるが、論破においては対話が成立しない。加えて経験のほとんどは対話を通して織りなされる。

経験は何重ものリズムの絡み合いだが、対話もまた独特の時間の経過だ。対話においては、正しい／正しくない、意見が合う／合わない、結論が出る／出ないは本質的ではない。どちらでもよい。

ウ

話が続くことは対話を構成する絶対的な要件である。時間的な経過をもたない対話ということはありえない。サミュエル・ベケットの不条理劇のようにぎくしゃくと噛み合わない会話が続き、着地点が見えなかったとしても、まさにじりじりとした、間延びした持続ゆえにそれは対話である。

一人称で生きられる、経験・思考・対話それぞれが、複雑な交わらないリズムの絡み合いと時間の蓄積をもつのだ。

「エビデンスを出して」

さて、数値化は多くの i を一般化することで過去の ii を取り出し、未来の iii を予測しようとする行為である。偶然性を iv することで統計的な予測は手に入れられる。得られる時間は一般的な傾向としての過去と未来である。多くのデータの集合体が示す v された推移だ。

数値によって得られる知識は現代社会の骨格をなす重要なものであるが、一人ひとりが内側から生きた経験の厚みと揺らぎは、俯瞰的に眺められ平均化されたグラフでは表現できない。視点のとり方が異なるのだから、個別の経験は数値的なエビデンスには収まらない。

^B「エビデンスを出して」と求めるとき、その人は、瞬時に相手に対して優位を示せると考えている。そこには、相手の言葉を聴き続ける忍耐も、相手の経験の厚みを尊重する気づきも、状況の複雑さを受け止める寛容も消えてしまう。対話と経験の時間がショートカットされる。

数値こそが真理になった現代社会

客観性と数値は、産業革命後の西欧の歴史のなかで重視されることになった概念である。

数値をめぐるターニングポイントは1870年頃にある。自然科学だけでなく、社会や人間の心理にも統計が用いられるようになることで社会学や心理学といった学問が成立し、自然にとどまらず人間の営みを数値によって客観的に扱うことができるようになった。

今回注目したいのは、客観的な数値データが判断のプロセスをショートカットすることを可能にしたという、時間と労力の節約である。個別の事情と背景の文脈、偶然の出来事がもつ多くのパラメータは、必然的に迷いと熟慮、試行錯誤のプロセスを含み込む。客観性と個別性の水準の違いがショートカットされ、熟慮がショートカットされたときには、反射的な反応が残る。何らかの価値観をもとに数値を盾にして相手を黙らせる。

もちろん統計を用いた判断にも慎重な熟慮が必要であり、そもそも統計的なデータを手にするための忍耐強いプロセス自体が膨大な思考と労力を必要とすることを、統計データを作る人は熟知している。このような熟慮のプロセスと背景に横たわる個別の状況のあいまいさを、論破の道具としてエビデンスを騙る人は無視する。

競争主義における冗長な時間の消失

社会と心を数値で計測することが可能になったとき、西欧は帝国主義のサイセイキだった。

19世紀にダーウィンやラマルクの進化論、そしてスペンサーの社会進化論が生まれた。自然界も社会も進化する。進化の最終形態は人間であり、人間界においても白人男性を頂点とした能力のヒエラルキーがあるという思考が拡がった。この流れのなかで、1904年にイギリスの社会学者、ゴルトンによって、人種改良をめざす優生学が生まれる。進化論という極度の目的論は、複雑なリズムの層を許容せず、歴史を単線化する。

同時期にフランスのビネが開発した心理テストは、人間の発達と能力の複雑さを数直線へと単純化した。これがアメリカにおいて優生思想を証拠立てるツールとして用いられる。英語による学校教育を受けていることを前提としたテストは、教育機会を奪われた黒人や移民に不利に働く。そして障害をもつ女性への不妊手術も、優生思想を根拠に行われた。

優生思想は弱い立場に置かれた人を排除する思想だが、冗長性を許容しない経済的効率という時間感覚に支えられている。資源だけでなく、人間も加速する有用性へと駆り立てられた。

数値によりショートカットされた反射的な判断が、このような序列や排除の意識と結びついたときには差別を助長するツールとなる。差別そのものが長い歴史をもつが、20世紀に優生思想が生まれたことで新しい段階に入った。効率(=加速する時間)からの排除という形をとるのだ。日本において高齢者や障害者が、高度経済成長期以降に郊外の大規模施設へと隔離収容されたことも、政策のなかに埋め込まれた非効率なものの排除だ。現代社会はどの断面をとっても数値による効率化が支配するので、数値に依拠した差別がイリヨクをもつことは容易に想像できる。

E
エビデンスに依拠しない個人の経験は、陰謀論やイデオロギーに回収されるのではないかと懸念する人がいるかもしれない。しかしそれは違うことが以上の議論からわかる。

というのは、陰謀論やイデオロギーは、経験の複雑なリズムや冗長性、対話の時間をショートカットしてしまう点で競争主義と同じ効果をもつからだ。エビデンスに溺れて経験の厚みを隠蔽するのと同じように、陰謀論やイデオロギーのなかで経験の厚みが切り落とされる。私が警戒しているのはこのような現代的なショートカットである。

経験の個性性を大事にするとは、思考と対話の経過とあいまいさを尊重することであり、陰謀論やイデオロギーと強く対立する。

スキルの加速度

数値は競争を生み出す。競争は均質化された数直線の時間のなかで加速度的なプレッシャーを与える。この加速度は、数直線の軸の上に生が位置づけられたことで生まれた、現代独特のリズムだ。

数値による知識をもつことで人より優位に立つという価値観が拡がっている。数値に頼らない事象は見下される。数値の是非以前に、そもそも「優位に立つことが価値だ」と思うこと自体が、この息苦しい社会に閉じ込められた姿だ。競争主義のなかで人は追い立てられる。誰もが自分のスキルアップ、果てはリスキリングを強要され、数値化できる能力を何重にも求められる。^(注3)

競争主義のなかに身を置いている人全員が、余裕がなく、無駄がなく、^(注4) バッファがない状態に追い込まれている。数値が至上の価値である以上、この舞台からおりることはできない。人生全体が効率に追い立てられたとき、時間のすき間がなくなる。リスキリングという恐ろしい言葉は、数値へと追い立てる加速が、50代の私にまでも襲いかかっている事態を言い表している。

数値は判断のプロセスをショートカットするだけでなく、人生自体を、数値に追い立てられ、すき間をもたない均質な数直

線にする。数値化されうるスキルの獲得へと駆り立てられたときには、経験がもつ多様な交わらないリズムと冗長性はもはや意味をもたない。ましてやカオスやあいまいさは忌むべきものとして排除される。カオスとあいまいさ、冗長性が許されない場所では私たちは生き延びることができるのだろうか？

悪意という根本気分

炎上やヘイトスピーチにおいては、熟慮にもとづく判断を経る前に、すでに態度が決定されている。そして発話には誰かを貶めたいという悪意が潜んでいる。その悪意は、本質的に競争や差別という排除をとまなう社会構造に乗って発現する。

悪意という根本気分に乗って、エビデンスなり陰謀論なり差別なり、ショートカットを可能にするツールが用いられる。つまりエビデンスを尊重するという名目よりも前に悪意がある。人間は太古から暗い欲望をもっただろうが、数値に支配され加速する時間に追いつてられる現代においては、数値をツールとする「論破」や「炎上」という時間のショートカットを生み出す。誰かを傷つけたい、貶めたいという根本気分が強い信念となつて対話や熟慮がショートカットされるから、議論の余地はそもそもない。応答したとしても相手が説得されることは構造上あり得ない。追いつてられる社会のなかで、数値によつて、一つひとつの繊細な言葉選びや忍耐強い対話に対してとどめのイチゲキ^⑤が加えられるかのである。そして悪意をもつ人の背景には深い傷つきがあるのかもしれない。

ショートカットは生きづらさをもたらす

人間には人を見下し、排除しようとする暗い欲望がある。それが日常生活のさまざまな場面で発露しては、人を傷つける。差別の場合には、人種化や男尊女卑といった排除と抑圧を正当化する大きな社会構造に乗って、暗い欲望が作動する。差別が排除の線を固定化するのに対して、競争社会で数値ゆえに自分が優位に立っていると主張するときには、基準線が動いた途端に自分が排除される不安と背中合わせであり、なおさら強く捌め捕ら^{かち}れて追いつてられる。

経験の厚みと対話をショートカットした悪意が誰かを傷つけるとき、悪意の主は排除を生み出す社会構造の奴隷となっており、自分の傷に蓋をし、頭によぎる不快な現実を否認しているのだ。現代社会において生きづらさを感じるとき、人は状況に耐えるための冗長なプロセスをショートカットしている。このショートカットが、外に向く悪意のさなかでも「数値」の名前を借りてしまうほど取り込まれているのだろう。

(村上靖彦「論破のリズム、スキルの時間 暗い欲望と数値が支配する現代について」『中央公論』二〇二四年四月号 中央公論新社 一部改変あり)

(注1) パラメータ——変数値。ここでは、場面によって変化する要素。

(注2) ヒエラルキー——ピラミッド型の秩序。

(注3) リスキリング——より高度なスキルを身につけるための再教育。

(注4) バッファ——緩衝の役目を果たすもの。

問一 波線部①と②の漢字の読みを書きなさい。また、波線部③④⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二

ア	イ
---	---

ウ

 には、それぞれ「しかし」もしくは「加えて」が入る。組み合わせが正しいものを次のⅠ～Ⅳから一

つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|
| Ⅰ | ア | しかし | イ | 加えて | ウ | しかし |
| Ⅱ | ア | 加えて | イ | しかし | ウ | しかし |
| Ⅲ | ア | しかし | イ | 加えて | ウ | 加えて |
| Ⅳ | ア | 加えて | イ | しかし | ウ | 加えて |

問三

i

s

v

には次の選択肢(a)～(e)のいずれかが一つずつ当てはまる。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

(a) 均質化

(b) 事例

(c) 典型例

(d) 捨象

(e) 傾向

問四 傍線部Aについて、個人の経験を「お気持ち」として批判する人にとって、「お気持ち」とはどういうものか。説明しなさい。

問五 傍線部Bについて、「エビデンスを出して」と求める人は、なぜ、そうすることで、相手に対して優位を示せると考えているのか。理由を説明しなさい。

問六 傍線部Cについて、筆者は、真のエビデンスを示すことと「エビデンスを騙る(あたかもエビデンスに基づいているかのように見せかける)」ことはどのように異なっていると考えているか。説明しなさい。

問七 傍線部Dと同じ意味で使われている言葉を本文中から抜き出しなさい。

問八 傍線部Eについて、このような懸念があるのはなぜか。説明しなさい。

問九 傍線部Fについて、筆者がこのような疑問を抱くのはなぜか。説明しなさい。

二 一の文章は『和泉式部日記』の一節である。和泉式部はかつて冷泉天皇の第三皇子・為尊親王と恋仲にあつたが、為尊親王が亡き後は追慕の日々を過ごしていた。そこへ亡き恋人の弟である敦道親王からの手紙が届き新たな恋が始まるが、天皇の息子と受領の娘という身分違いの恋であつた。また、敦道親王はその身分から自由に外向くことができず、加えて恋多き女性という噂のある和泉式部に対して疑惑の念を抱いていた。この内容に続く以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

宮、例の忍びておはしまいたり。女、さしもやはと思ふうちに、日ごろのおこなひに困じて、うちまどろみたるほどに、門をたたくに聞きつくる人もなし。聞こしめすことどもあれば、人のあるにやとおぼしめして、やをら帰らせたまひて、つとめて、

①「あけざりしまきの戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し

憂きはこれにやと思ふも、あはれになむ」とあり。「昨夜おはしましけるなめりかし、心もなく寝にけるものかな」と思ふ。御返り、

「いかでかはまきの戸口をさしながらつらき心のありなしを見む

おしはからせたまふめるこそ。見せたらば」とあり。今宵もおはしまさまほしけれど、かかる御歩きを人々も制しきこゆるう

ちに、内、大殿、春宮などの聞こしめさむこともかろがるしう、おぼしつむほどに、いとほるかなり。

③雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながめに、世の中をいかになりぬるならむとつきせずながめて、「すきごとする人々はあまたあれど、ただ今はともかくも思はぬを。世の人はさまざまに言ふめれど、身のあればこそ」と思ひて過ぐす。宮より「雨のつれづれはいかに」とて、

おほかたにさみだると思ふらむ君恋ひわたる今日のながめをとあれば、折を過ぐしたまはぬををかしと思ふ。あはれなる折しもと思ひて、

慕ぶらむものとも知らでおのがただ身を知る雨と思ひけるかな

と書きて、紙のひとへを引き返して、

「ふれば世のいと憂さのみ知らるるに今日のながめに水まさらなむ

待ちとる岸や」と聞こえたるを御覧じて、立ち返り、

「なにせむに身をさへ捨てむと思ふらむあめの下には君のみやふる

たれも憂き世をや」とあり。

五月五日になりぬ。雨なほやまず。一日の御返りのつねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを」などのたまはせられたれば、

「夜もすがらなにことをかは思ひつる窓うつ雨の音を聞きつつ

かげにゐながらあやしきまでなむ」と聞こえさせられたれば、なほ言ふかひなくはあらずかしとおぼして、御返り、

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにと

昼つかた、川の水まさりたりとて人々見る。宮も御覧して、「ただ今いかが。水見になむ行きはべる。

大水の岸つきたるにくらぶれど深き心はわれぞまされる

さは知りたまへりや」とあり。御返り、

「今はよもきしもせじかし大水の深き心は川と見せつつ

かひなくなむ」と聞こえさせたり。

おはしまさむとおぼしめして、薫物などせさせたまふほどに、侍従の乳母まうのぼりて、「出でさせたまふはいづちぞ。こ

のこと人々申すなるは。なにのやうことなききはにもあらず。使はせたまはむとおぼしめさむかぎりは、召してこそ使はせた

まはめ。かるがるしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そがなかにも、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまう

で来なむ。すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがしがし始むることなり。故宮をも、これこそあて歩きたてまつりし

か。夜夜中と歩かせたまひては、よきことやはある。かかる御供に歩かむ人は、大殿にも申さむ。世の中は今日明日とも知ら

ず変はりぬべかめるを、殿のおぼしおきつることもあるを、世の中御覧じはつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」と聞こえたまへば、「いづちか行かむ。つれづれなれば、はかなきすさびごとするにこそあれ。ことごとしう人は言ふべきにもあらず」とばかりのたまひて、「あやしうすげなきものにこそあれ、さるは、いと口惜しうなどはあらぬものにこそあれ。」^⑥呼びてやおきたらまし」とおぼせど、さてもまして聞きにくくぞあらむ、とおぼし乱るるほどに、おぼつかなくなりぬ。

〔和泉式部日記〕 一部改変あり

(注1) 宮——敦道親王。

(注2) 女——和泉式部。

(注3) さしもやは——まさかお見えになるまい。

(注4) 聞こしめすこと——宮が女の噂でお聞き及びのこと。女の男性関係についての噂。

(注5) 人々——宮のそば近くに仕える侍従の乳母などをさす。

(注6) 内——一条天皇。

(注7) 大殿——左大臣藤原道長。

(注8) 春宮——皇太子。敦道親王の同母兄居貞親王。

(注9) 身のあればこそ——「いづ方に行き隠れなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ」(『拾遺和歌集』・よみ人しらず)をふまえる。

(注10) 紙のひとへを引き返して——何枚か重ねた紙のうちの一枚を裏返しにして。

(注11) かげにゐながらあやしきまでなむ——「降る雨に出ででも濡れぬわが袖のかげにゐながらひちまさるかな」(『拾遺和歌集』・紀貫之)をふまえる。

(注12) きし——「来し」と「岸」とを掛ける。

(注13) 川——「川」と「彼は」とを掛ける。

(注14) 侍従の乳母——敦道親王の乳母の呼名。

(注15) やうことなき——「やむことなき」に同じ。

(注16) 右近の尉——敦道親王の世話をする側近。

(注17) 故宮——為尊親王。

問一 二重傍線部ア、ウの主語に相当する人物を、それぞれ次の語群から選んで記しなさい。

大殿 女 宮 乳母

問二 傍線部①「あけざりしまきの戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し 憂きはこれにやと思ふも、あはれになむ」について、このように述べた「宮」の心情とはどのようなものか。現代語で説明しなさい。

問三 傍線部②「見せたらば」は、「人知れぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな」(『拾遺和歌集』・よみ人しらず)を一部引用したものである。これをふまえて、傍線部②の前後に省略されている言葉を補って現代語に訳しなさい。

問四 傍線部③「雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながめに、世の中をいかになりぬるならむとつきせずながめて」を現代語に訳しなさい。

問五 傍線部④「をかしと思ふ」について、「女」がこのように思った理由を現代語で説明しなさい。

問六 傍線部⑤「かひなくなむ」について、このように返事をした「女」の心情はどのようなものか。現代語で説明しなさい。

問七 傍線部⑥「呼びてやおきたらまし」について、「宮」がこのような発言をするに至ったきっかけは何か。現代語で説明しなさい。